

【報告】

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同利用共同研究課題「負債の動態に関する比較民族誌的研究(2)——人間経済における負債の多元性，相克，創造性」2024 年度第 2 回研究会（通算第 8 回目）

開催日時：

2024 年 10 月 26 日（土） 10:00～17:15

場所：

AA 研マルチメディアセミナー室（306）、オンライン会議室

プログラム：

10:00-10:05 司会 開始の挨拶

10:05-11:35 吉村竜（明治大学）「貸借の履歴をめぐるブラジル日系農業者のふるまい」

12:35-14:05 吉田ゆか子（AA 研所員）「バリ島の大祭における芸能とお金の移動」

14:05-15:35 沓掛沙弥香（東北学院大学）「アフリカの言語実践から〈人間経済〉を照射する」

15:45-17:15 全員 総合討論

参加者： 15 名

概要：

2024 年度第 2 回研究会を上記の日時およびスケジュールのもと実施し、15 名が参加した。本研究会において、まず吉村は、ブラジル南東部で果樹園を営む日系人たちの、カネ、モノ、土地などをめぐる貸借の履歴について報告を行った。次に吉田は、インドネシア・バリ島の大祭に関するフィールドワークの記録をもとに、芸能とお金の移動について報告を行った。さらに沓掛の報告は、マルチリンガリズムに特徴づけられるアフリカの言語実践から「人間経済」を照射するものであった。最後に参加者全員で、今年度後半の計画の方針の確認、および本研究会に直接関わる計画・進行中の事業に対する意見交換を行った。司会は佐久間が務めた。各報告の概要は下記の通りである。

（文責 吉村）

貸借の履歴をめぐるブラジル日系農業者のふるまい

吉村竜（明治大学）

本発表では、ブラジル南東部都市近郊で果樹園を営む日系人が、カネやモノ、土地をめぐる貸借によって、ブラジル固有の社会・生態環境に根差した果樹園経営を行ってきたことを明らかにした。発表者がまず注目したのは、(1)ブラジル全土で活動した日系協同組合の解散とその後の地方組合としての再編にあたって生じた、売上未払いと借金の清算などの問題であった。一部の

日系人が、組合員に対して本来得られるはずの収益の支払いをせず、また返済すべき借金をふみたおしたと噂されることについて、これに関わった日系人の多くは彼らに対する恨み、不満、不信感を抱く一方で、その真相を明らかにしようとせず、むしろかつての彼らの働きかけに恩を感じていた。そこから見えるのは、経済的負債が社会的負債によって乗り越えられる、貸借の履歴であった。さらに発表者は、(2)日系人が同組合の融資により購入した土地（およびそこに定植されている果樹）を貸出しても、借り手の日系人が自らの持ち物にすることに負い目を感じているという事例を紹介した。そしてこの負い目には、貸借以前の持主と、土地や木とのあいだのやりとりの履歴、および貸し手と借り手のゆずりあいの履歴があるということを検討した。そして、(3)日系人が果樹に対するお返しとして収穫後に「お礼肥」をするという事例を紹介し、こうした「日系農業者と木とのやりとりの履歴」がどのようなものかを考察した。「お礼肥」は、擬人法によってあらわされた、果樹と人との貸借の一つであろう。それは果樹栽培に関する在来知として捉えることもできる。本発表ではこれについて、コントロールできない状況下での都度の対処を必要とするケアの履歴、および人にも果樹にも刻まれている貸借の履歴として読み解くことができることを明らかにした。また、貸借の履歴についての以上の事例から浮かび上がる恩、負い目、ゆずりあい、ケアという観点から、発表者自身の研究課題である「日系農業者のモラルがいかんして育まれ、維持されるのか」を考察することの可能性について言及した。

（文責 吉村）

バリ島の大祭における芸能とお金と労働

吉田ゆか子（AA 研所員）

本発表ではインドネシア・バリ島の大祭の直近の調査の報告を行った。バリ・ヒンドゥ教にある Tri Rna という概念では、人は生まれながらにして、創造主である神、親や先祖、そして僧侶や教師など導き手に負債を抱えているとされる。人びとは一生の間に儀礼を催すことを通じてこの3つの負債を返済してゆく。よって儀礼は返済の過程として見ることができる。今回はM村のダレム寺院の、30年に一度といわれる大祭を例に、特に本番初日から3日目にかけてのプログラムのなかで芸能まわりのお金や労力がどのように調達され、負債を返すプロセスにどのように人々や組織が関わるのかを考察した。

各世帯は現金に加え供物や食料、そして労働提供するほか、県政府、州政府、そしてその他の有志や団体からの多額の寄付が集められる。当日は多様な芸能が同時に奉納され、視覚的にも聴覚的にも賑やかな状況が生み出され、神々は沢山の供物でもてなされる。こうした過程に関わることで芸能家たちにとっても喜ばしく名誉なことであり、多くの演者が（特に村民である場合）報酬を受け取らないか、そのほとんどを寄付という形で寺に返す。他方神々が市場を開いたり（人間はそこで買い物をすることができる）、大地を踏みしめ踊りを披露したりする場も設けられる（人間はその劇と一緒に上演したり、観客として楽しんだりする）。そうした神々とのやり

取りには負い負わせる者の支配的な関係だけではない、人と神々のより親密な戯れの姿を見て取ることができる。

(文責 吉田)

アフリカの言語実践から〈人間経済〉を照射する

沓掛沙弥香（東北学院大学）

本発表では、マルチリンガリズムに特徴づけられるアフリカの言語実践から「人間経済」を照射することを試みた。まず、アフリカの人びとの語る言語観には揺れがあり、その揺れが、(1) 脱脈絡化されたモノとしての「言語」（西欧的言語観であり、交換原理に回収される）と、(2) 誰かと「分かちあうこと」によって意味が生じる脈絡依存的な「言語」(＝レパートリー (repertoire)) を説明する際の違いによって生じるものとしてとらえ、「人間経済」を考えるうえで重要な「言語」は交換原理に回収されない文脈に埋め込まれた「言語」であるとした。

次に、「アフリカの言語実践」について、西アフリカを中心としつつ、広く「アフリカ」のさまざまな社会の事例を網羅的に詳述した Lüpke & Storch (2013) (Repertoires and choices in African languages. Vol. 5. Walter de Gruyter) から読み解き、「人間経済」との接点を明かにすることを試みた。Lüpke & Storch (2013) を選んだ理由は、(a) 近年の応用・社会言語学的潮流の先駆的な考察がなされていること、(b) ラトゥールによるアクターネットワーク理論も参照されており、本研究の問題意識とも親和性が高いためである。Lüpke & Storch (2013) において描き出されるのは、話者たちが多様性を道具化するという共存戦略によって共有空間を維持するさまであり、そこでは、複雑な社会的ネットワークと、世代や文化的・地理的背景の異なる人々の間の継続的で濃密な関係が重要な社会的資本として維持されている。「ジェネラリスト的言語戦略と人間関係の多様化」によって、不完全な部分を他者に負いながら自らの可能性を押し広げる、共生の技法としてのマルチリンガリズムは、経済的側面からも、財産(＝人間関係)を増やすものとして機能しているといえ、この点で、「人間経済」と大きく関連する。

加えて、グレーバーが『負債論』で示した「それぞれの人格 (person) が『それぞれが他者との諸関係のただひとつの結合中枢 (nexus)』であるために比類なき価値をもつ」という言説が、「人間経済」の核心として(グレーバーの議論からさえ)脱文脈化して一人歩きする可能性への懸念を示した。アフリカの言語実践から理解されるべきことは、さまざまな人、モノ、歴史、社会文化、経済的資源が交差する場、あるいは集まる場で生じる相互作用によってアフォーダンスが満たされる、一時的・流動的・可変的で、決して固定できない不完全性なものとしての「それぞれの人格 (person)」しかないということであり、その意味で、上記の言説が「変わらないもの」へのロマン化に回収されることがないように、注意が払われる必要がある。

(文責 沓掛)